

<研究ノート>

音読活動の再考察

江原 一浩*

Reinvestigation of Reading Aloud

EHARA Kazuhiro *

抄 録

音読は、英語の授業で最も身近な活動であるが、その実態については、十分に適切な理解が進んでいない。認知心理学、第二言語習得理論、英語教育学の研究分野の知見を踏まえて、その機能と効果を考察すると共に、音読活動の目的、授業展開での位置づけ、活動形態、活動の留意点について再確認する。

Abstract

Reading Aloud is the most popular activity used in English learning classrooms. However, it is likely that what is behind this activity, that is, its function and effect, is not fully understood. This study focuses on what is mentally happening in the process of this activity in terms of cognitive psychology, second language acquisition theories, and English education. Also, the study attempts to reexamine its stage in the teaching procedure, purposes, types, and notes to keep in mind for conducting it.

キーワード：音韻ループ、スキル獲得、情報処理プロセス、活動の手順、動の多様性、活動の留意点

1. はじめに

音読は、日本における英語学習場面で頻繁に行われている活動である。実際、2015年にベネッセが実施した中学高校の英語教員を対象にした「中高の英語指導に関する実態調査2015」によると、「授業において行う指導方法・活動内容」の第一位は音読で、中学校では98%、高校では95%の教員が授業で導入し

ていると回答している。また、ラジオやテレビの英語教育番組では、学習者にその日のダイアログやスキットをリピートさせる活動が例外なく設定されており、さらに、市販の音読に関わる（シャドーイングを含む）教本には、提示された文や文章を繰り返し復唱する活動が必ず含まれている。これほど身近に行われている学習活動にも関わらず、音読の実体である機能やその効果について、また、

* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

活動の目的、授業展開での位置づけ、音読の種類、留意点について、十分に適切な理解が進んでいないように思われる（竹内、2018）。そこで、認知心理学、第二言語習得理論、英語教育学の研究分野の知見を踏まえて、音読活動を再考察すると共に、音読指導の基礎・基本を再確認する。

2. 音読とは

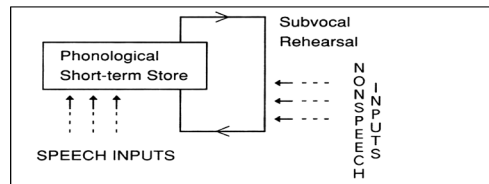
音読は、文字で書かれている情報を声に出して読む行為である。その過程では、文字を視覚的に認識し、音韻変換（文字と音声とのマッチング）を行い、音声として表出する一連の作業である。

2.1 認知心理学的観点から

音読の過程を認知心理学におけるワーキングメモリ（作動記憶）という観点から捉えれば、音韻ループ内の構音リハーサル過程で行われる心の唱え（inner voice もしくは inner speech）を実際に音に出すという形で顕在化するものであると言える（卯城他、2009）。このリハーサルは、能動的に反芻する処理作業である（門田 & 野呂、2001）。音韻ループとは、会話や文章の理解など言語的な情報処理に関わるもので、入力情報（インプット）を心の中の声で繰り返し、心の耳でそれを聞くという言語リハーサルにより、そのインプットを保持するメカニズムである。右図にあるように、音韻ループは、音韻貯蔵庫（phonological store）と構音リハーサル（subvocal rehearsal）という2つの大きなシステムから構成されており、音韻貯蔵庫ではインプットの処理を、構音リハーサルでは一時的な情報の保持を担っている。Baddeley and Gathercole（1993）によると、聴覚呈示された音声インプットは音声貯蔵庫へと直接入力されるに対し、視覚呈示されたインプット（文字や語）は、まず視覚コードから聴覚

コードへ変換され、その後、構音リハーサルを繰り返しながら音韻貯蔵庫へと入力されるという。ワーキングメモリ内で保持できる情報量は、1回について平均して 7 ± 2 の項目しか保管できず、保持時間はわずか1秒から2秒と言われているが、内声で繰り返し、活性化続けることで保持時間を伸ばすことができる（Grabe & Stoller, 2002）。

音韻的ワーキングメモリ（音韻ループ）の構成

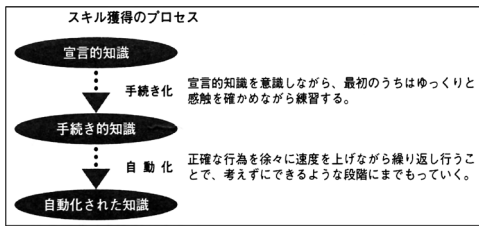


（Gathercole & Baddeley, 1993:8にもとづく）

私たちは、文字を読む際、ここでは黙読を指すが、目にした情報が消えてしまうのを防ぐために、意識的にまた無意識的に、心の中の声で繰り返している。音読は、この音韻化作業の内なる声を、実際に声に出すという行為で強化し（卯城他、2009）、音韻情報の処理と保持の効率化を高めていると言われている（宮迫、2003）。

2.2 スキル獲得理論の観点から

第二言語習得で、学習と習得がどのように関わりを持つのかを示すモデルに、インターフェースモデルがある。強形のインターフェースモデルでは、明示的学習で得た知識は、練習を繰り返すことで、暗示的知識に変換できるという立場を取っている。ただし、その練習方法は、スキル理論に沿って、段階的に3つのステップを丁寧に踏んで進んでいくことを条件としている。



(和泉, 2016 : 211にもとづく)

スキル獲得の過程は、上の図で示されているように、3つのステージで構成されており、最初に宣言的知識 (declarative knowledge) を習得し、それを手続き的知識 (procedural knowledge) に昇華させ、最終的に自動化された知識 (automatized knowledge) へと段階的に進むことになる。

宣言的知識とは、学習者がある事柄を知っていて、言葉である程度説明できる知識を指す。この知識は、明示的知識 (explicit knowledge) とほぼ同じものである。知識形態としては「知っている」という「理屈」の部分にあたる (和泉, 2016)。一方、手続き的知識とは、感覚的な知識で、学習者がほとんど意識せずに、何かをどのようにできるかを知っていると同時に、何かができる状態を指している。この知識は、暗示的知識 (implicit knowledge) と言い換えることができる。知識形態では、「知識をいつでも自由に使える」という「実践」にあたる。この宣言的知識から手続き的知識への変化は、練習によって進められると考えられている。頻繁に引用される具体例として、自動車の運転技術や自転車の乗り方のスキル習得過程がある。まず、ハンドルやブレーキ等の名称や機能、および操作方法の説明を受けて、それを理解する (宣言的知識)。その後、試行錯誤を繰り返しながら練習を重ねることで、徐々に一連の動きがスムーズになり、あまり注意を払わずにも操作することができるようになる (手続き的知識)。最終的には無意識に全ての操作が自由にコントロールすることができる

ようになる (自動化された知識)。

音読は、「言語知識の自動化」や「手続き化」を進める効果があると考えられている (村野井, 2006)。口を動かし、耳で聞くことで、口と音のイメージを密接に結びつける、つまり、運動記憶と聴覚心像 (acoustic image : 音の響き) を一体化させることで、学習で得た知識の定着が進む。学んで理解した文を、何度も何度も繰り返し声に出し、「口に憶えさせる」ほどに練習すると、語句が「口をついて出てくる」状態に至ることは、経験的に知られている。また、Samuels (1979) は、同じテキストを2度以上読む「繰り返し読み」の研究の中で、スポーツ選手や音楽家がいかにスキルを向上させ、動きがスムーズになる過程を学習者に理解させることの重要性を説いている。

2. 3. 第二言語習得研究における認知的プロセスの観点から

村野井 (2006) は、文部科学省の検定を受けた英語の教科書を利用する内容中心の授業展開方法を提案している。下の図で示されているように、授業は、提示 (Presentation)、理解 (Comprehension)、練習 (Practice)、産出 (Production) の大きく4つの段階で構成され、この順序で展開されるので、各段階の活動の英語表記の頭文字を取って PCPP 指導と称している。教科書で扱う題材内容をもとに、「提示」段階では、学習者の題材に対する興味・関心を高め、学習者の持つ背景知識を活性化させつつ、内容についての英語による口頭導入を行う。また、本時のターゲットとなる文法事項や表現を扱う場合もある。次に、「理解」の段階では、教科書の本文内容をより適切に、より深く理解する活動を行う。その後、「練習」段階では、学習した事項や理解した内容を踏まえて、コミュニケーション能力の土台を固め、さらに高める練習を行う。授業のまとめとなる「産出」段階で

は、本文内容やメッセージについての自分の考えを深め、内容について英語で概要や要点をまとめたり、内容に関する考えや意見を表現したりする活動を行う。

PCPP 授業の展開の中で、音読は練習段階での主要な構成要素の1つとして加えられており、理解活動から産出活動へとつながる橋渡しの役割を担うとしている。

内容中心の PCPP 授業の概略

(1) 提示 (Presentation)	題材内容、トピックへの口頭導入 (oral introduction) 文法・語彙項目のコンテキストの中の提示
(2) 理解 (Comprehension)	リスニング・リーディングによる理解
(3) 練習 (Practice)	語彙の発音練習 意味文型練習 (meaningful pattern practice) 音読 (reading aloud)
(4) 産出 (Production)	理解度確認 トピックに関する産出活動(要約, story retelling, dictogloss ¹⁵⁾ , レポート作成活動など)

下線は筆者が加えたものである。(村野井仁、2006: 20にもとづく)

第二言語習得研究では、情報処理モデルであるインプット・アウトプットモデルが提唱されている。このモデルの特徴は、人間の認知活動(知覚、思考、解釈、推論、モニタリング等)をコンピュータの情報処理プロセスである「データの入力から処理へ、そして、処理データを外部出力へ」に例えている点である(馬場&新多、2016)。このモデルでは、学習者の内部で起こる情報の変容過程を、気づき(noticing)、理解(comprehension)、内在化(intake)、統合(integration)の4つの段階に区分し、この認知プロセスを経て、アウトプットが可能になるとしている。学習者が与えられたインプットに注意を向けると、そのインプットは「気づかれたインプット(noticed input)」となり、他のインプットと分別され認知プロセスを経て、インプットがアウトプットに変化することが可能になるとしている。この認知プロセスをもう少し詳しく説明すると、「気づき(noticing)」だけでは時間の経過とともに記憶の彼方に消失

してしまう。そこで、「気づかれたインプット」に「理解」というデータ処理が伴うと次の段階に移行する。この「理解」段階で、言語習得で重要な言語形式と意味と機能のマッピング(form-meaning-function mapping)が行われ、学習者の内にある中間言語システムへの取り込み口である「内在化」のプロセスが始められる。内在化された言語知識は「インテイク」と呼ばれ、既に中間言語内に存在している関連知識と結び付けられる再構成・再構築という「統合」のプロセスを経て、最終的に自由に無意識に使える、つまり、自動化された「中間言語知識」(interlanguage knowledge)として整理され、さらにしっかりと学習者の中間言語システムの中に組み込まれる。

村野井は、認知プロセスの枠組に沿って、上記のPCPP指導の展開を関連付けた図を提案している(次ページの図を参照)。

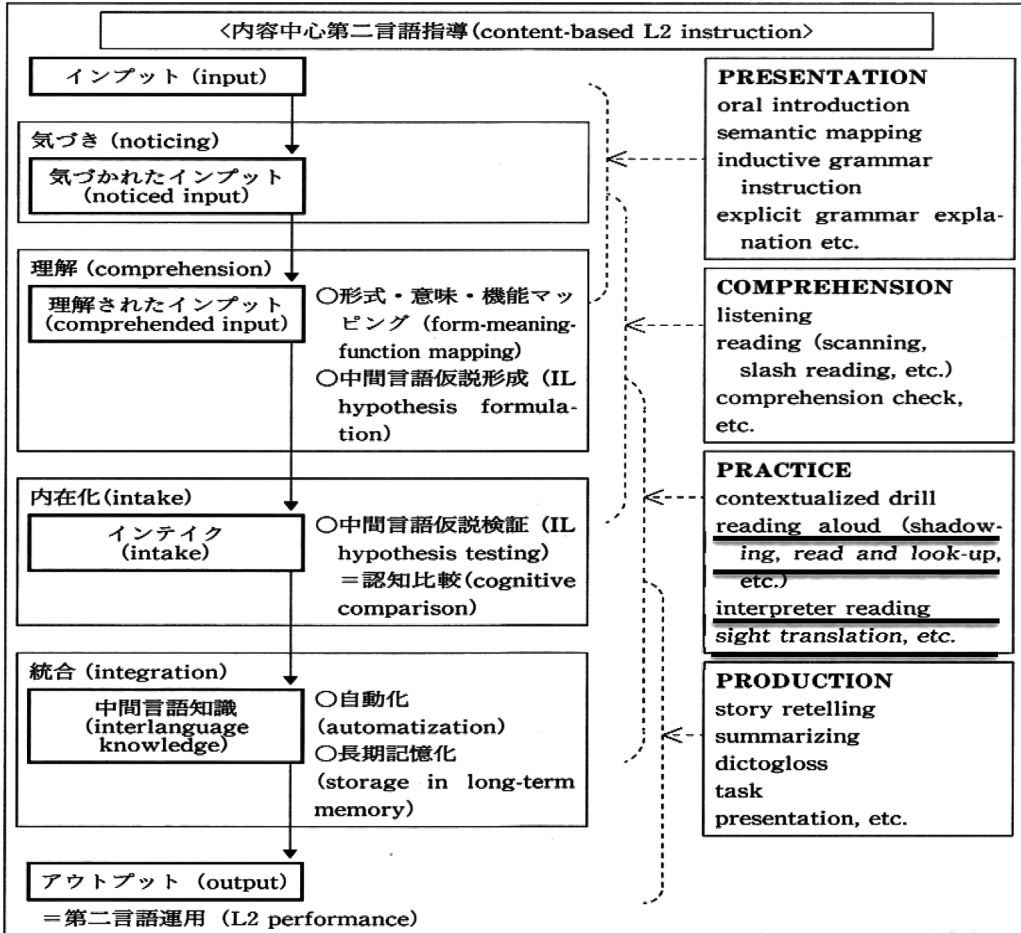
認知プロセスの観点から音読活動を捉えると、情報処理の「理解」から「統合」までの過程と関連している。特に、「内在化」や「統合」などの重要な第二言語認知プロセスを促進する活動であると考えられている。

以上のように3つの観点から音読の機能と効果をまとめると、音読は音韻ループの内声を声に出すという作業により情報の保持機能を強化し、言語知識の「自動化」を促すと伴に、学習者の内に存在する中間言語知識に向けて理解したインプットを「内在化」から「統合」へ変容させる橋渡しの機能を備えている活動とすることができる。

3. 指導展開における音読の位置づけ

音読は、授業展開の中で、どの段階で行うがよいのであろうか。導入活動と新出単語の発音練習を行い、指導者や音声教材によるモデル・リーディングからすぐに斉読(Chorus reading)へ展開する授業が散見されるが、

第二言語習得の認知プロセスと PCPP による第二言語指導



下線は筆者が加えたものである。(村野井 仁, 2006:23にもとづく)

音読の機能と目的を考えると、教科書の本文内容が理解できた後に音読活動へ進むことが合理的な流れである。本文の意味を適切に理解し、文脈や使用場面を意識しつつ、理解した情報と形式（文字と音声）を結びつけることで、形式と意味と機能のマッピング (form-meaning-function mapping) が行われ、言語の習得につながるからである。読解活動と音読活動は連続的であり補完的なものである。また、日常における口頭でのコミュニケーション行動を考えてみると、伝えたいこと、共有したいこと、メッセージがあるから

こそ、言葉を発するのであり、意味も分からず、機械的に声を出す行為は不自然である。

高等学校の外国語科目の一つにコミュニケーション英語がある。この科目における内容中心の PCPP 指導に沿った授業展開例の中での音読活動の位置づけと、多様な音読活動の段階的な流れを以下に示す。

- (1) Greetings (挨拶)
- (2) Oral Introduction of the New Material (英語による口頭導入)
- (3) Model Reading (教師の肉声による範読)

- (4) Pronunciation Practice of New Vocabulary Items (新出単語の発音練習)
- (5) Silent Reading with Reading Questions for Comprehension (内容理解のための黙読)
- (6) Explanation (本文内容の説明)
- (7) Reading Aloud with Comprehension (音読)
- ① Chorus Reading after the Teacher (斉読: 指導者のモデルに続いて一斉に読む)
 - ② Buzz Reading (自由読み: 学習者が自分のペースで音読する)
 - ③ Individual Reading (指名読み: 指名された学習者が音読し、指導者がチェックする)
 - ④ Cloze Reading (虫食い音読: 文の一部が欠落したテキストを読む)
 - ⑤ Sight Translation Reading (サイト・トランスレーション: 文の一部を英語や日本語にしながら音読する)
 - ⑥ Synchronized Reading (聞き読み: テキストを見ながら、モデルの読みに重ねるように読む)
 - ⑦ Shadowing (シャドーイング: テキストを見ないで、モデルの読みに重ねるように読む)
- (3) Summary Writing (本文の要約)
- (4) Story Retelling (再話)
- ① Individual Preparation for Retelling (個人練習)
 - ② Rehearsal in Pairs (ペア練習)
 - ③ Story Retelling (教室の前で発表)
 - ④ Students' Feedback or Question & Answer Session (他の学習者からのコメント、もしくは、質疑応答)
 - ⑤ Teacher's Feedback (指導者からのコメント)

上記の指導展開(7) Reading Aloud with Comprehension の下位項目にある斉

読(Chorus Reading)、自由読み(Buzz Reading)、指名読み(Individual Reading)が音読活動の大黒柱であり、この流れが基本的音読活動の手順となる。その後、発展的な音読活動が続く。発展的な音読活動を大別すると、音声に重きを置いた活動と、文字に重きを置いた練習の2種類がある。音声面により意識を向ける音読活動には、重ね読み(Parallel Reading もしくは Overlapping) と称される同時読み(Synchronized Reading)とシャドーイング(Shadowing)がある。文字面により注意を傾ける活動には、虫食い音読(Cloze Reading)、サイト・トランスレーション(Sight Translation)などがある。同じテキストを扱いながらも活動形態の変化、また、活動の負荷を漸進的に高めることで、学習者の集中力を維持し、学習意欲を高め、学習事項の定着を図ることができる。また、自己表現活動の基礎技術を固める部分なので、練習時間を十分確保して、丁寧に取り組ませたい。同じ形態の音読活動でも、学習者のレベルや活動の目的(音声重視、もしくは、文字重視)に応じて負荷を調節することも欠かすことができない。学習者間で英語力のレベル差がある場合は、レベルに応じた負荷の異なる活動を選択させるとよい。例えば、重ね読みの音読活動を実施する際、英語力に自信のない学習者にはテキストを見ながら行う Synchronized Reading を選択させ、自信がある学習者には負荷の大きい Shadowing を選ばせることができる。学習者に選択権を与え、自分の英語レベルに適した課題を提供することで、個々の学習者に寄り添った学習者視点の活動に変換することになり、活動への取り組み方に変化をもたらすことができる。

4. 音読活動の種類

音読には様々な活動形態がある。個々の活動形態の内容、手順、留意点に焦点を当てて

紹介する。まずは、音読の基礎・基本である、斉読(Chorus Reading)、自由読み(Buzz Reading)、指名読み(Individual Reading)から取り上げる。その後、発展的活動形態を、文字中心のものと音声中心のものに大別して、5つの活動を紹介する。

4.1 斉読 (Chorus Reading)

斉読は、一斉読み(Chorus reading)とも呼ばれ、指導者や音声教材によるモデルのすぐあとに続いて、学習者たちが全員で一斉に声を出して読む活動である。音声教材を使用するよりも指導者の肉声の方がよい。学習者の習熟度に合わせて、スピードの調節ができるし、チャンク(意味のまとまり)の長さも調整できる。また、プラソディ(発音、リズム、抑揚、ポーズ、ストレス等)に関する困難が生じる部分では、その部分で立ち止まり、繰り返し練習させることが可能である。さらには、本文が伝えるメッセージ性の強い部分について、内容を反映させるように声色に変化を加えたり、音量を高めたり低めたりすることで解釈読み(interpretive reading)に発展させられる。一般的に付属の音声教材のモデルは、仕方がないことではあるが、録音する際に、録音スタジオ、もしくは、録音ブースで、目前に聞き手を置くことなく読んでいる。また、標準化された読みが要求されるであろう。このようなことが影響されているのか、読みが平板で無色なものとなり、色や味が感じられない。指導者は、標準的な読みの上に、指導者なりの色付けや味付けをすることで、生き生き感を加えることができる。

斉読を2度行うこともある。その際には、学習者の動機付けに配慮して、よりチャレンジングな活動にするために、負荷を高める小さな変化を加えるとよい。例えば、読むスピードを速めたり、チャンクの範囲を伸ばしたり、音の結合・脱落・同化等の音声変化を

意識させ、その要素を取り入れた音読とする。この活動の前提条件として、学習者に活動の目的、読み方、機能について事前に説明しておく必要がある。1回目の読みと2回目とは何が違うのか、どう発展的なのかを説明して、理解させておく。単に強制的に、儀礼的にやらされるという受身の姿勢ではなく、次の目標を掲げ、一段上の課題に挑戦するという積極的な姿勢を引き出すことで、学習者の活動の取り組む姿勢が変わってくる。

4.2 自由読み (Buzz Reading)

斉読の次に来るのが Buzz Reading である。指導者のモデルという補助輪を外して、自力で自転車を走らせる、音読自己練習である。学習者が、個人練習をする声が教室に響き渡る状況を、ハチが飛行する際に発する「ブーン、ブーン」という羽音に例えてこのように呼ばれている。Buzz Reading では、時間を区切り、学習者ひとりひとりに、自由に、自分自身のペースで音読させる方法である。斉読のように他人に影響されることなく、各自が、どこが適切に読めて、どこが上手く行かないのかと自分の学習状況を確認しながら練習する。個人指導ができる重要な場面であるので、指導者は、こまめに机間巡視して、個々の学習者が発する英文に積極的に耳を傾け、褒めたり矯正したりする必要がある。また、巡回中に、後続する指名読みで指名する学習者候補を見つけることもできる。

4.3 指名読み (Individual Reading)

指名読みでは、指導者がある個人を指して、全員の前で音読させる方法である。Buzz Reading での個人練習の成果を披露する場面でもある。指名読みがあるからこそ、Buzz Reading への取り組む姿勢がより真剣なものとなる。誰の名前が呼ばれるか分からないため、いつ指名されてもよいように十分に練習する必要性を覚えるからである。聞き手(指

導者や他の学習者)を意識させて、聞き手に内容が伝わる読み方を習慣づける練習でもある。そのため、聞き手は文字を見ずに、指名された生徒の音読を聞くようにすることが望まれる。指導者は、指名された学習者が適切に読めているかどうかをチェックして、もし誤りがあれば、矯正する必要がある。学習者の心理面を配慮し過ぎて、誤りをそのままにしてしまうと、誤ったまま記憶されてしまい、化石化現象の原因となり、後々矯正することが困難になる。一方で、誤りの矯正の際には、学習者の年齢、性格等を考慮に入れ、自己否定や活動への嫌悪感を抱かせないように最大限の注意を払う必要がある。否定的な表現は避け、「～をこうすると、もっと良くなるよ」と前向きな気持ちを引き出すような言葉をかけるよう心掛けたい。

4. 4 Read and Look up (Look up and Say)

この活動は、文字中心の発展的音読活動の一形態である。テキストを見ながら、直前に見たり聴いたりした文を、一時的に記憶して、文字から目を外し、口頭で再現させるものである。テキストを読む(Read)ために下げていた顔を、強制的に上げ(Look up)させることで、文字が視界から消え、記憶を頼りに、見ていた文を音声化する一連の動作からこの活動名が付けられている。学習者は、文の全体構造、意味のまとまり(チャンク)、時制等の文法知識と聴覚心像(acoustic image:音の響き)を総動員してこの作業を行うこととなる。対象とする文は、長さにより、チャンク(一フレーズ)ごとに区切る場合もあれば、まるごと一文を扱うこともある。また、対象となるフレーズや一文を、教師が音読する場合もあれば、学習者自身が音読したり、黙読したりすることもある。その後、顔を上げて、目にしていた文を学習者が読み上げる作業は同じである。指導者が音

頭をとり、学習者に行動を促す言葉“Read”や“Look up”と指示するパターンもあれば、学習者の自主性に任せ、それぞれのペースですべての過程を行なわせるものもある。指導者は、事前に、自らこの活動を繰り返し試してみて、扱う文の長さ、指示するタイミングと間、活動時間を調節する必要がある。実際にやってみると、想定したこととは異なる部分が表出してくるので、まずは、実体験してみる。その上で、修正加工して、学習者に提供するようにしたい。

4. 5 虫食い音読 (Cloze Reading)

この活動も、文字重視の発展的音読活動である。文の一部(単語)を空欄にしたり、黒く塗りつぶしたりして、欠落した部分を埋めながら音読させる方法である。全員で行うこともあれば、ペアで行うこともある。空欄があるとそれを埋めたくなくなるという人の心理面を上手く利用した活動と言える。空欄の作り方は、等間隔の方法、特定の品詞(動詞、前置詞等)を空欄にする方法、重要な熟語や単語や内容的に重要となる部分を空欄にする方法など様々なものが考えられる。また、空欄に入れる単語を引き出しやすくするために、語頭や語尾の文字をあらかじめ提示しておくこともある。空欄を埋めるためには、学習した文法や構文の知識、理解したテキスト内容を利用する必要がある。例えば、主語があれば、動詞が後続するとか、文脈から時制を判断するとか、トピックに関する名詞の選択など。この活動は、前提条件として、テキストを見ながらの音読活動を何度も行い、本文を見れば容易に読める段階で行うものである。空欄に入れる単語が分からなければ、教科書を見てもよいとすると、活動に対する安心感が生まれる。慣れてきたら、ヒントとなる語頭や語尾の文字を消したり、空欄を増やしたり、連続する語を空欄にしたりして難易度をコントロールすることもある。難易度の異な

る二つの虫食い音読ワークシートを用意して、学習者に選択させてもよいし、易しいものから難しいものへと二つの虫食い音読を連続して取り組ませてもよい。

4. 6 サイト・トランスレーション (Sight Translation)

この活動も、文字重視の発展的音読活動である。文の一部をあらかじめ日本語に訳しておいて、即座に口頭で英語にしながら音読をする方法である。この逆パターンで、英文をフレーズごとに日本語に訳していくこともある。英文とその意味の結びつきを深め、頭から読んでその語順で理解する直読直解の処理作業を強化する訓練となる。また、言語の変換が伴うため、コードスイッチング (code-switching) の速度が要求され、負荷の大きい活動である。この活動に至る過程で、同じ英文の音読を何度も何度も繰り返し、英文の文頭の語句を見た瞬間に文全体の構造のイメージと文の聴覚心像が浮かび上がり、与えられた日本語と照合することで、記憶されていた部分が引き出される状況にしておかなければならない。サイト・トランスレーションは、文字重視の音読活動の最終段階のものである。それゆえ、この活動に至るまでの過程を適切に設定しておく必要がある。学習者に無理のない程度に少しずつ難易度を上げていく段階的な音読活動を綿密に計画し、同じ英文を5回以上読んだ上で実施する。

4. 7 聞き読み (Synchronized Reading)

この活動は、音声面を重視した発展的音読活動である。テキストを見ながらモデルの読みに重ねる (シンクロする) ように読む練習である。テキストを見ながらのシャドーイングと行うことができる。いきなりシャドーイングを行うのは負荷が大きいため、その前段階のウォーミングアップとして、文字を見ながら、聞こえてきた英文とほぼ同時に、声を

出して再生する。文字を見ながらのものであるので、学習者には安心感がある。指導者のモデルと重ねるものと、音声教材を利用したものもある。学習者の活動の様子を観察することを考えると、音声教材を利用したほうが、観察だけに注意を払えるので、より適切なものと思われる。

4. 8 シャドーイング (Shadowing)

音声面を重視した発展的音読活動であり、究極の音読活動である。もともと会議通訳者を養成する基礎訓練の一つとして、通訳者養成機関で使われてきた訓練法である。シャドーイングとは、英語を聞いて、少し遅れて、聞こえてきた英語をそのまま声を出して再生する作業である。モデルの音源に影 (shadow) のようについていくので、このような名前が付けられている。この練習を継続的に行うことで、リスニング力の向上、発音やイントネーションの改善、英語が意味のまとまり (チャンク) として記憶に定着する効果があると言われている。また、集中して英文を聞くことが要求されるので、英文に対する集中力が高まる。モデルに自分を同化させ、自身がネイティブスピーカーになった気持ちで活動に臨ませたい。上手くついていけない場合には、その部分を飛ばして、後続する部分から再度チャレンジするように指示する。事前に、音の連結・脱落・変化について指導してから取り組ませると、ついて行きやすくなる。通常教室で行う場合、音源であるスピーカーの音量を最大限に上げないと、学習者が発する声に打ち消されて、モデルの声が聞こえにくくなる。活動後、上手くいかなかった部分をテキストで確認し、困難を生じた原因を追求させ、できるだけ「気づき」を起こさせるよう指導したい。この「気づき」が言語学習を向上させる原動力となる。

5. 音読指導の留意点

ここでは、音読活動を普通教室で実施する際に、指導者が配慮すべき事項を取り上げる。

(1) 活動の目的や効果を学習者に明確に伝える (Samuels, 1979; 竹内, 2018)。活動の目的も意味も効果も知らせずに、ただ当たり前のように活動を行っていませんか。授業の展開でそうになっているから、やるのが当たり前ではなく、何故音読を行うのか、音読とはどんな機能であり、どんな効果があるのかを学習者に理解させた上で、活動を行いたい。音読の価値が分かってこそ、学習者は真剣に取り組む姿勢が整う。

(2) 必ず意味を考えながら音読させる。文字の音声化だけに注意を奪われて、意味の把握に神経が回らない読み方を排除する。英文が目から入り、意味の処理を行わず、ただ音を唱えるだけの読みを **eye-mouth reading** と称したり、オウムのように機械的な模倣作業を行う読みを **parrot reading** と呼んだりする。文字と意味は表裏一体で切り離せないものだと認識させ、文の持つメッセージを音声で伝えるという意識を常に持たせることが音読活動の大前提である。**eye-mind-mouth reading** や **meaningful reading** へと転化させたい。

(3) 音源は動かない。音読の際、指導者は教室前の中央に立ち、教室内を歩き回らない。テレビドラマで、英語教師役の芸能人が、教科書を片手に持ち、列の間を歩きながら英文を読んでいる光景がよく映し出されるが、これは大きな間違いである。何故なら、座席の位置で、声の大きさが変化してしまうからである。音源である指導者は、学習者全体の前の中央に立ち、教室の隅々まで声を通る音量で読まなければならない。また、聞き手である全学習者に向けて、英文の内容を伝

える意識を持つこと。これらは音読活動の基礎・基本である。

(4) 範読の際にも学習者を観察する。単位となる英文を読み上げ間を取る際には、必ず教科書から目を外し、学習者の様子を観察したい。指導者が英文を読むことだけに集中してしまうと、本来注意を払うべき学習者達の学習状況を見落とすことになる。また、手に持った教科書で口の部分を隠さない。学習者の中には、指導者の口の動きに注目し、その動きをヒントに調音しながら、音読活動を行う者がいる。教科書で顔を隠すことなく、音声面に加えて、表情でも、本文の内容を表現するように工夫したい。

(5) **Chorus Reading** の際には、次の文を読むタイミングに注意する。指導者の範読の直後に、学習者の音読が続くのだが、指導者が音読することだけに集中し過ぎて、学習者全体が復唱し終わる前に、次の文を読み始めてしまうことがある。学習者達の復唱を最後まで見届け、また、聞き届けてから、次の文に移るようにしたい。

(6) 平板な文を立体的に。範読する際には、聞かせ読みを心掛けて、登場人物の心の動き、作者のメッセージ、描かれている場面が浮かび上がるような色付けをしたい。読むスピードを変えたり、音量を上下させたり、声のピッチの高低を利用したりして、紙に書かれた平板な文章に生命を吹き込み、息吹が感じられる音読を行いたい。

(7) 場面や状況を設定する。感情移入を容易にするために、事件現場を取材するレポーター、ニュースを報道するアナウンサー、民話や物語を伝える語り部等の役割を与えて、その役割に合った読み方をさせる。活動に小さな変化を加えることで、取り組み方にも変

化が生じ、感情のこもった読みをする学習者が現れる。

(8) 活動を個人化する。言い換えれば、学習者に活動に対する選択権を与える。全員が常に同じ活動を行うのではなく、学習者に選択する自由を与え、自分に合ったレベルの活動に取り組ませることで、活動に対する責任感を持たせたい。自分のレベルを超えていると判断し、取り組む前からやる気を失っている学習者がいる一方、あまりにも活動が易しすぎて、真剣に取り組めないと思う学習者もいる。そこで、同じ形式の活動で、難易度の異なるワークシートを二つ用意する。例えば、虫食い音読ワークシートで、表は虫食い部分の数が少ないもの、裏は数が多いものとする。同じ用紙で、2つのレベルの課題を提示し、学習者にその難易度を確認させた後、どちらを選ぶか決めさせる。自分で決めることで、自主性が生まれ、活動に取り組む姿勢が前向きなものとなる。

(9) 指導者が学習者のあこがれの対象になる。指導者は、事前準備で、音声教材を利用して、何度も何度も自主音読練習を行い、単なる範読ではなく、学習者に刺激を与えるような読み手となるよう努力すべきである。指導者の印象は、発話や音読の際のプラソディの質に大きく左右される。教科書を音声教材のモデルのように読むこと、もしくは、超えるような読み方をすることで、指導者に対する態度、さらには、授業に対する姿勢が変化する。出来るだけよい刺激を与え、この指導者の指導を受けたいと望まれるほどに練習を重ね、自信を持って音読活動に臨みたい。

(10) 音読活動に適した環境の創造をする。学習者の情緒面に配慮して、誤りに対する大きな不安を感じたり、過度の緊張感を覚えたり、活動に対する嫌悪感を抱かれたりしない

ように、学習者が行う読みを出来るだけ肯定的に捉えて、良い点を見つけてそれを褒め、それから矯正すべき点を指摘するように配慮する。読んだ成果や努力を認めることで、学習者に自己肯定感を覚えさせ、また読んでみたいと思わせるような環境を整えたい。

(11) 直接体験で音読効果を味わわせる。音読活動後、同じ英文を、文字を見ないで、リスニングさせる。以前に比べ、理解できる英文の量が増え、より鮮明に英文が聞き取れるようになっていくことを味わわせる。直体験に勝るものではなく、音読活動の価値を明確に認識する機会を与えることができる。

6. まとめ

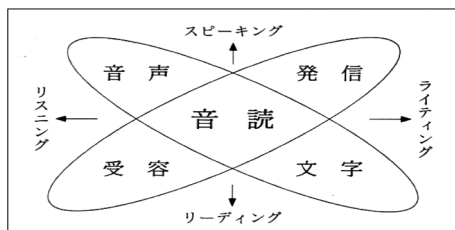
英語の授業で最も頻繁に行われる音読に焦点を当て、その機能や効果を、音声ループ、スキル獲得および情報処理プロセスという観点から考察した。音読は、記憶保持の強化、言語知識の自動化・手続き化の促進、インプットの内在化および統合への変容に効果があることが分かった。さらに、音読活動の目的や授業展開での位置づけ、多様な活動形態と指導をする際の留意点について再検討した。音読活動は、コミュニケーション能力の基礎作りの活動であり、英文の理解を伴ったうえで実施すべき活動である。基本から発展まで、音声重視から文字重視まで多様な形態があり、同じ形態でも難易度の調整が可能である。指導者は、プレーイングマネージャーのように、学習者と指導者の目を持って、音読活動を段階的に統合的に綿密に計画し、実施したい。

音読は、下図が示すように、4技能のいずれに対しても効果のある学習方法である(飯野、2003)。英文が表す意味を認識しつつ、聞き手にメッセージを伝えるように、文字を音声化して発信する。英文を適切に音声化す

ることで、聴覚心像が強化され英文が聞き取りやすくなる。音読により、言語知識が強化され、文法知識や語彙が増える。それがライティング力の向上につながる。

音読は、指導者によって様々な方法を取ることが出来る。それゆえ、指導者は、音読についての十分で適切な知識を備え、その上で、学習者のレベルに合った活動を計画し、実施する責任がある。

音読と4技能



(飯野 厚, 2003: 24にもとづく)

【参考文献】

- 飯野 厚 (2003) 「英語が苦手な生徒こそ音読を！」『英語教育』September 2003 Vol.52 No.6, pp.24-25 大修館書店
- 和泉伸一 (2016) 『第2言語習得と母語習得から「言語の学び」を考える』アルク

- 卯城祐司 (編) (2009) 『英語リーディングの科学』研究社
- 門田修平, 野呂忠治 (2001) 『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 竹内 理 (2018) 「再考『音読活動』」『TEACHING ENGLISH NOW』Fall 2018 Vol.40 pp.1-6 三省堂
- 馬場今日子, 新多 了 (2016) 『はじめての第二言語習得論講義』大修館書店
- ベネッセ教育総合研究所 (2016) 『ダイジェスト版 中高の英語指導に関する実態調査2015 (ダイジェスト版)』
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 宮迫靖静 (2003) 「データから見た音読の効果」『英語教育』September 2003 Vol.52 No.6, pp.10-12 大修館書店
- Gathercole, S. E. & A. D. Baddeley. (1993) *Working Memory and Language*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Samuels, S. J. (1979) The method of repeated reading. *Reading Teacher* 32: 403-408
- William Grabe & Fredericka L. Stoller. (2002) *Teaching and Researching Reading*. Harlow, UK: Pearson Education